

み言葉は旧約聖書・詩編・使徒書と続き、聖歌をはさんで福音書に入ります。この聖歌の代わりに賛美の詩編を用いることもあり、これを、階段を昇ると書いて昇階唱と呼んでいます。昔、福音書は説教壇のような段の上で読まれていたのです。そして福音は異邦の地に向って読まれるということで、朗読者は北に向かって読んでいました。しかし現在は、私たちの交わりの中により知らせ、すなわち福音がおとずれたということを重視し、朗読場所も会衆席の中心で読むようになり、会衆も一同福音書の方を向くことになったのです。これによって福音が私たちのところへ訪れたことを現しているのです。

さて福音とはよい知らせという意味であり、主イエスがこの世でなされたことや教えられたことが直接記されている内容が朗読されます。大きな礼拝になりますと両側にトーチが立ち、ろうそくの光に囲まれて福音書が読まれることがあります。この世に福音の光が現されたことを示しているのです。このように礼拝は、具体的な形を通して、主なる神のこの世への働きかけを具体化する業であるということができましょう。

福音書はみ言葉のクライマックスということが出来ます。福音書は主イエス直接の教えということで、旧約聖書や使徒書は着席して拝聴するのに対し、福音書は立って拝聴します。また福音書の朗読者も現在のところ、執事または司祭に限られています。

また福音書の前後には「主は皆さんとともに・・・主に栄光、主に感謝します」という前後に唱和が用いられます。以前の文語の祈祷書時代には、主イエスの受難の日であります受苦日（聖金曜日）および聖土曜日はこれを用いない慣習がありましたが、現在の口語の祈祷書からは常に用いることになりました。これは主イエスが十字架の死を遂げたことは、主ご自身の死から命への過越しであったということであり、主イエスの十字架上の死は栄光がなくなったわけではないからです。

福音書に続いて説教がなされます。説教はこれまで拝聴してきた旧約聖書・使徒書・福音書のみ言葉の説き明かしであり、説教はこの中から、あるいは特祷に含まれている主題をもとに行われるのが原則です。初代教会においては教育が十分ではありませんでしたので、字を読めない人が大勢いました。従ってみ言葉の説き明かしは礼拝の中で重要なことだったのです。

今日説教で重要なのは、み言葉を2000年前の教えとして受け止めるのではなく、時間や背景、文化を越えて、今日の社会へのメッセージを伝えることです。いわばみ言葉の21世紀理解を伝えることが説教の重要な役割であるのです。教役者としてこの説教への取り組みは一生続く重要な課題です。

み言葉を聴き、説教を聴いて、わたしたちは主なる神への信仰を新たに見出し、その告白としてなされるのがニケヤ信経です。朝夕の礼拝で用います使徒信経をさらに詳しくしたのがニケヤ信経と言ってよいでありましょう。使徒信経は2世紀頃から用いられ始めていました。325年、登場してきたアリウス派など数々の異端に対して正しい主なる神への信仰告白を見出すために教会会議が行われ、三位一体の神を信じるのが正当とされたのです。この会議の場所がニケヤだったことからこの名前がついているのです。

ニケヤ信経に続いて代祷がなされます。代祷は文語の祈祷書では全公会のための祈りと呼んでおり、世界中の教会に連なる人々のための祈りです。毎週の週報には今週の代祷の項目が掲載されて

いますが、これは代祷表に定められている内容に従って行われています。さらにわたしたちの北関東教区・そして協働活動が続けている東京教区、そしてわたしたちの川越基督教会に関する具体的な項目を挙げ、祈りをささげるのです。教会の中で喜んでいて人と共に喜び、悲しんでいる人に主の慰めが与えられるように、苦しんでいる人に、主の癒しが与えられるように、不安と恐れにある人に、希望が与えられるように祈るわけです。代祷をささげるのはその役割からして執事の務めですが、信徒奉事者など会衆の代表が行うことも望ましいこととされるようになりました。

また病気療養中の方々に主の癒しのみ力が与えられるように、そして逝去記念日を迎える兄弟姉妹の上に御魂の光明と平安を祈るのも代祷の大切な務めです。教会の皆様の状況を把握して、礼拝の中でささげることが牧師の務めなのです。祈祷書の323ページに病者訪問の式という祈りが掲載されていますが、この説明書き（ルブリック）に、病人があるときは司祭に通知しなければならないと書かれています。これは病気の人を教会は特に助ける義務を負っているからです。大した病気ではないから、皆さんに心配をおかけするのも申し訳ないからと遠慮されるケースがありますが、どうぞ普段からこのことをよく心に留めて置いていただければと思います。牧師はご本人や御家族の意思に反して行動することはありませんので、よろしくお願ひしたいと思います。またお知らせいただきたい病気とはどのような病気であるかですが、原則として入院療養を必要とする場合、手術を要する場合、療養が長期期間にわたる見込みの場合などです。特に生命に関わる場合は是非ご連絡をお願ひしたいと思います。

代祷に続くみ言葉の最後の部分としてなされるのが懺悔です。わたしたちのささげものが御心にかなうように、わたしたち自身がまず自らの日々を振り返り、赦罪を求めるのです。すべての罪は思いと言葉と行いによって起きます。これ以外の罪はないことから、わたしたちは自分自身のすべての行いの中で起きた罪を具体的に言い表すために、思いと言葉と行いという言葉で罪の赦しを求めるのです。またこの懺悔の祈りに代えて司式者と会衆が相互に祈りあう形、これを嘆願形式と呼んでおりますが、その場合に用いる式文が295ページに掲載されています。

主イエスは、わたしたちの罪の赦しのため、十字架にかかられましたので、この祈りによってすべての罪は主なる神によって赦されます。主なる神による罪の赦しとしてはこれで十分なわけですが、なお良心に責めがあり、安心を得られない時は、牧師あるいは希望する他の司祭のもとへ行き、秘密厳守の上で罪の告白をなし罪の赦しが与えられる個人懺悔の式がそなえられています。これは祈祷書の298ページです。ローマカトリック教会ではイースターやクリスマスにこの個人懺悔を行うことをよく勧めておりますが、聖公会では希望があった場合行われることになっています。

また、以前はよく礼拝に遅れてしまった場合、懺悔に間に合った場合は陪餐してよいが、間に合わなかった場合は陪餐をしないようにと教えられていました。あるいは懺悔をしていない場合は、陪餐の直前に懺悔の祈りを唱えて罪の赦しを受け、陪餐するようにと教えていたこともあります。現在は、もし懺悔に間に合わなかった場合でも、皆がその人の罪の赦しも祈ってくれたとのことで、そのまま陪餐するようということになっています。礼拝に遅れてくることは好ましいことではありませんが、せつかくお見えになったのに陪餐せずというのは残念なことですので、現在はそのように勧めているわけです。皆様もこのことをご理解いただいて、今後のご参考にしていただければと思います。

懺悔をもってみ言葉の部分は終わり、聖餐の部分へと入っていきます。聖餐式もここで前半部分が終わったこととなります。主イエスの定められた聖餐の部分については、来週学びを深めてまいりましょう。